

Title	貫井万里君博士学位請求論文審査要旨
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	2008
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.77, No.1 (2008. 7) ,p.158- 163
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20080700-0158

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

貫井万里君博士学位請求論文審査要旨

テヘラン・バーザールとナシヨナリズム運動―一九五〇年代イランの石油国有化運動を中心として―

論文の概要と審査要旨

一九五三年三月二三日サウデアラビアをめざして神戸港を出帆した出光興産所属のタンカー日章丸は、インド洋のセイロン島沖からアラビア海へ向けて航海を続けていたが、四月五日東京の出光本社から暗号の無電を受け、当初の目的地とは違う方向へ針路を変更した。新たな行き先はかねてより秘密裡に打ち合わせてあったペルシア湾の奥にあるイランの港アバダーンであった。

日章丸は四月一〇日アバダーン港に入り、そこで石油を船載、四月一五日には帰国の途についた。戻るにあたって日章丸が取った航路は、通常のルートとは大きく外れていた。この頃イランでは石油国有化運動が起こされていたが、二〇世紀初めから同国における石油利権を独占していたイギリスはこれを阻止すべくイランに対して経済封鎖網を張りめぐらしていた。日章丸はイギリスによる臨検を恐れてマラッカ海峡を避け、インドネシアのスンダ海峡を通過する迂回航路を取って五月九日無事、川崎港に帰港した。

この日章丸によるイラン石油の日本への輸入は、戦後の日本経済にとって画期的な事件として記憶に留められている。敗戦後、アメリカの占領体制下に置かれた日本は、石油の自主的な輸入を全面的に禁止されていた。しかし、一九五二年四月講和条約が発効し主権を回復すると、日本は経済ナシヨナリズムの観点から石油の輸入を欧米系のメジャーに依存せず自力でエネルギー資源を確保し、産業を復興していく道を探った。こうしたなか行われたのが、出光興産のような民族系石油会社の保護育成であり、その一環としてなされた日章丸によるイラン石油の輸入であった。

しかし、この日章丸事件は、ナシヨナリズムという点からすると、イランにとって日本よりはるかに大きな意味を持っていた。一九五一年四月イランの首相に就任したモサッデクは、それまでイランの石油の掘削、精製、販売を一手に握っていたイギリスのアングロ・イラニアン石油会社(AIOC)、後の英国石油(BP)の関連施設を接収、石油産業を国有化した。これに対してイギリスは武力による威嚇、ハーグの国際司法裁判所への提訴、経済封鎖などの措置によって対抗した。こうした包囲網に風穴を開け、イギリスの掣肘を断って自力で輸出するきっかけを与えたのが日章丸事件であった。

貫井万里君の学位請求論文は、以上のように日本と密接な関係をもつイランの石油国有化運動をナシヨナリズム運動の観点から論じたものである。一九五一年四月から一九五三年八月まで続くこの運動は、経済的にはイギリス資本によって押さえら

れてきた石油利権を撤廃してイランの自主独立をはかり、政治的には一九二五年以来君臨するパフラヴィー王朝の独裁体制を国民の権利が真に保障される民主主義国家、国民国家に変えていこうとするものであった。このような意味でナシヨナリズム運動と規定される石油国有化運動を、その主要な担い手として重要な役割を果たした首都テヘランのバーザールで働く商人、職人に焦点を当て論じたのが貫井君の研究である。

論文の構成は、以下の章節からなっている。

目次

はじめに

第一章 石油国有化運動の射程

第二章 国民戦線とバーザール

第三章 石油国有化運動期のバーザリーの抗議イベント

第四章 ティール月三〇日（一九五二年七月二一日）蜂起とバーザール

第五章 ナシヨナリズム運動に身を捧げたバーザール商人

第六章 一九五三年八月クーデター事件とバーザール

第七章 現代テヘラン・バーザールの政治動向

おわりに

参考文献

以下、各章の論述内容を要約しながら、その評価、問題点について述べることにしたい。

第一章「石油国有化運動の射程」は、ナシヨナリズム運動としての石油国有化運動について考えていく際の方法論とその運動を牽引したさまざまな組織の中で何に注目すべきかという貫井君自身の研究対象への射程を述べる。石油国有化運動は元来、利権の廃棄という経済問題に端を発するが、次第に種々の諸勢力が政治的主張をぶつけ合う運動に発展していった。このため従来の研究は、もっぱら政治史の視角からなされることが多かった。しかし、貫井君はこれとは違って当時、イラン国内の流通・軽工業部門において圧倒的な影響力を持つテヘランのバーザールに着目し、その経済力、それに裏づけられた政治的役割の大きさを問題にする。

とりわけ貫井君が重視するのは、バーザールで働く中小の商人、職人たちがつくる「商人・アスナーフ（同職組合）・職人連盟」である。この組織は、日常的にはバーザールという市場空間で石油とは関係のない経済活動に従事するが、国有化運動が起きるとイラン経済全体の将来に対する思いから組織を挙げて抗議行動に立ち上がった。貫井君が扱って立つ方法論は、政治運動において組織が行使する動員力、それにもとづいて行われる抗議行動を統計的に分析する「社会運動論」に置かれているが、これにしたがって商人・アスナーフ・職人連盟という組織が果たした経済的、政治的役割を明らかにしていきたいとい

うのが彼女のねらいである。その着眼点は、従来の政治史偏重の研究を越えており、評価に値する。

第二章「国民戦線とバーザール」では、モサツデク政権を支えた統一的な政治組織Ⅱ国民戦線が取った戦術のなかできわめて影響力の大きかったバーザール閉鎖が取りあげられる。商人・アスナーフ・職人連盟はテヘランという都市のみならず、イラン全体の経済を麻痺させる効果をもつバーザールの閉鎖を行いながら石油国有化運動を側面から援護していこうとした。

貫井君はこれについて記す当時のペルシア語新聞から関連記事を丹念に拾い出し、それらを詳細な表、グラフにする。

これによって約二年半にわたった石油国有化運動期のテヘラン・バーザールの動きが手に取るようによく分かる。断片的な情報を集めて作成した表、グラフは労作と云ってよく、二五回行われたバーザール閉鎖のうち一七回が商人・アスナーフ・職人連盟による主催であり、モサツデクが辞任の危機に追い込まれた一九五二年七月にそれがピークに達したという指摘は、実証的で説得力がある。また商人・アスナーフ・職人連盟とともにテヘランのバーザールに影響力をもっていた大商人、新興の産業資本家などがつくる企業家連合の思惑、政治行動の違いについての前者との対比による説明も傾聴に値する。

第三章「石油国有化運動期のバーザールの抗議イベント」は、バーザール閉鎖以外に集会開催、抗議のための聖廟への避難、デモ行進、請願、声明の発表等さまざまな形を取って行われた抗議行動について扱う。貫井君は石油国有化運動に際して

表明された商人・アスナーフ・職人連盟の社会的、政治的要求が具現化する集合行動を社会運動論にしたがって「抗議イベント」と呼び、その統計をグラフにしてマクロ分析を行う。

また抗議行動において出された主張を整理し、そのうちのいくつかは政治的ナショナリズム、イスラーム的主張が混ざるものの、主たる要求は商人・アスナーフ・職人連盟に有利な輸入代替化政策、保護育成策に重きを置く経済的主張にあったと指摘する。前章と同様、この章の分析はグラフにもとづく斬新な説明の形を取る。しかし、商人・アスナーフ・職人連盟が国有化運動に託したナショナリズムへの思い、抗議行動をその息づかいが伝わってくるようなリアルな形で叙述していく工夫を充実させるとさらによかったと思われる。

第四章「テイルル月三〇日(一九五二年七月二一日)蜂起とバーザール」は、一九五二年七月一六日第二次組閣をめぐって国王モハンマド・レザー・パフラヴィーと対立し、辞任に追い込まれたモサツデクを支持して起こされた蜂起について論じる。これまでこの蜂起をめぐっては、トゥーデ党、国民戦線、カーシャーニーに代表されるシリア派ウラマーに焦点をあてた研究が多かったが、貫井君はそれとは異なりバーザール、とりわけ商人・アスナーフ・職人連盟が果たした役割の大きさを強調する。

とくにその指摘の中で貴重なのは、商人・アスナーフ・職人連盟が有するバーザールの内外に張りめぐらすネットワーク、チャンネルの強さ、政治的行動におけるたくましさである。こ

うした点を貫井君は、モハンマド・トルキヤマーンが編集した資料集『ティール月三〇日の民族蜂起』、アルサンジャーニーの『政治回想録』に拠りながら、第三章までとは違ったスタイルで叙述する。商人・アスナーフ・職人連盟の人たちにとってバーザールの閉鎖、デモ行進、マス・メディアを使った政治行動は、彼らが苦しみの中から編み出した「抵抗の文化」であるという指摘は、啓発的で印象に残る表現である。

第五章「ナシヨナリズム運動に身を捧げたバーザール商人」は、前章までが商人・アスナーフ・職人連盟という組織からみた国有化運動の分析であるのに対し、レバースチー（一九二五—一九二九）という連盟の有力な指導者の一人であった個人に光をあてた研究である。この章の執筆において貫井君が拠った史料は二〇〇〇年秋、駐イラン日本大使館に専門調査員として在勤した時期に偶然の機会からテヘランで入手したレバースチーのインタビュ―記録である。

貫井君はこれを読んで近年注目が集まるオーラル・ヒストリーの手法に則って当時のテヘラン・バーザールの動きを写す。分量がさほど多くないため「数字だけでは把握できない、個人の感情、人間関係、社会習慣を通して、運動の文化的・社会的要因を明らかにしようとする」という彼女の意気込みは必ずしも十分に生かされなかった憾みはあるものの、レバースチーが国民戦線各派の間で折衝役として対立解消に重要な貢献をしたというイメージはよく伝わってくる章になっている。

第六章「一九五三年八月クーデター事件とバーザール」は、

ティール月三〇日（一九五二年七月二一日）蜂起の成功によって政界に復帰し、石油国有化運動をさらに推進しようとしたモサッデク政権が、アメリカの画策する転覆工作によって崩壊していくさまが述べられる。石油国有化運動は、元来、イギリスとイランをめぐる経済紛争であった。しかし、第二次世界大戦後イランを含めて中東への経済的、政治的参入を議論するアメリカは、モサッデク派とそれに対立する国王派とが激しく衝突し、混乱するイランの国内政治に介入、クーデタの引き金を弾いた。

貫井君はこのようなイランをめぐる国際関係を近年公表された英米の公文書、とくにCIAの報告書に拠りながら明らかにする。そしてこのクーデタに際してテヘランのバーザールの中に商人・アスナーフ・職人連盟とは異なるアメリカおよびパフラヴィー王朝に協力する勢力が台頭し、これによって石油国有化運動が挫折していくさまが巧みに描かれる。

第七章「現代テヘラン・バーザールの政治動向」では、クーデタ後、テヘランのバーザールで働く商人、職人の政治志向性にどのような変化が現れたのかが扱われる。石油国有化運動期において商人、職人たちを惹きつけたのは、国民戦線に結集する諸政党であった。その政治観は多様であったが、カーシャニーを支持するイスラーム勢力を除き世俗主義という点では共通していた。しかし、一九六〇年代に入ると、このような状況に変化が生じ、バーザールの中にホメイニーを指導者に仰ぐイスラーム運動の影響が急速に浸透する。

貫井君はこのあたりの政治動向の変化をイスラーム・モオタ

レフエ協会の設立を通して概観し、それがイラン・イスラーム革命につながっていったという見通しを述べる。世俗主義からイスラームへの回帰という現象をバーザールの中でも確認したいという彼女の真摯な問題意識、ひたむきな思いが伝わってくる章になっている。しかし、全体を締めくくる最終章としては少し重すぎるという印象も拭えず、問題の所在に触れ、展望を述べる程度に留めた方がより良かったと思われる。

以上、各章ごとの要約を述べ、それぞれの問題点について指摘してきたが、最後に全体的な講評をしておくことにしたい。

貫井君の博士學位請求論文は、イラン現代史研究において一九七九年のイラン・イスラーム革命と並ぶ、時代を画する重要な事件であった石油国有化運動についての日本における初めての本格的なまとまった研究である。テヘランのバーザールが実体あるコミュニティとして政治的に機能したことを実証的に明らかにしようとする研究は、イランのみならず欧米の学界でもこれまで試みられたことがなく、きわめて独創的な光彩を放ち、高い評価を与えることができる。

また、全体の章構成も、すでに述べたように最終章が若干、重すぎるのを除いて順を追ったよく考え抜かれた体裁と工夫が凝らされている。第三章まではペルシア語の新聞史料に拠つつ「社会運動論」の方法、統計的手法を駆使してマクロな観点から石油国有化運動期におけるテヘラン・バーザールの動きが明らかにされ、第四章以下は一転して回想録、オーラル・ヒス

トリーを利用したミクロな視点からの、叙述に重きを置く組織、個人の分析になっている。このように角度を変えて多面的にテヘランのバーザールの動きを描こうとしたのが貫井君の論文であり、石油国有化運動の流れが全体として説得的によく伝わってくる構成となっている。

ただ、敢えて注文をつけるとすれば、最初の章で述べられた方法論の部分に改善の余地が残されている。そこで貫井君は、石油国有化運動をナシヨナリズム運動の視点から見えていきたいという鮮烈な問題意識からナシヨナリズムの学説史、社会運動論について詳説する。しかし、その整理の仕方は大上段から理論を紹介するという面が勝ちすぎており、鍵となる用語、言説の引用がいささか生硬な印象は否めない。歴史研究に理論が必要なのは改めて贅言するまでもないが、肝要なことはそれを自分の頭で咀嚼した上でみずからの言葉で語り、歴史叙述の中に生かしていくことである。貫井君に求められるのは石油国有化運動期におけるテヘラン・バーザールの熱気と喧噪、そこでの商人、職人の思い、行動をナシヨナリズム、社会運動論という理論を踏まえながら描き込んでいくことだと思われるが、理論と叙述をいかに調和させていくかという歴史学の大きなテーマを常に意識した研究を今後さらに積み上げていくことを期待したい。彼女にはそれをやり遂げる力があると確信する。

貫井君がテーマとして取りあげた石油国有化運動は、一九五三年の国王派クーデタによるモサッデク政権の崩壊、国王親政体制の成立によって頓挫した。この後、石油国有化は名目的に

は保たれたものの、内実はイギリスのアングロ・イラニアン石油会社の単独支配に代わって国際的なコンソーシアムによる共同支配に変わった。セブンシスターズと呼ばれるアメリカの石油メジャーも加わった新しい体制の下でイランの経済がどう影響され、その不満がイラン・イスラーム革命にどのような影響が及ぼったのかは貫井君に残されたもう一つの大きな課題である。

以上、長々と講評を書き連ねたが、貫井君の論文は内容と構成、ペルシア語および英語で記された史料を縦横に駆使した語学力に鑑みて学位請求にふさわしい資格を備えていると考える。ここに審査員一同は、一致して貫井万里君に博士（史学）の学位を授与することが適当と判断するものである。

論文審査担当者

主査	慶應義塾大学文学部教授・文学研究科委員	坂本 勉
副査	早稲田大学国際教養学部教授	桜井 啓子
副査	アジア経済研究所副主任研究員	鈴木 均

二〇〇七年度修士論文要旨

〔日本史学専攻〕

近世後期カラフトにおける交易統制と先住民

浅見 礼文

本稿の目的は、蝦夷地の第二次直轄化後における山丹交易統制の実態を明らかにすることである。前期幕領時代の松田伝十郎の交易改革によってカラフトアイヌは山丹交易から除外され、その制度の基本は幕末まで踏襲されたと言われる。交易統制の方針に変化はないのか、またアイヌは交易と完全に切り離されていたのか等、カラフト政策のなかで交易活動と密に関わる部分に焦点を定め、分析を試みる。『箱館奉行文書』に残る現地詰幕吏・箱館奉行・老中らのやり取りを改めて細かく分析しなおし、幕閣の意図が現地でのように受け止められ、実施されたのか、また逆に現地の幕吏のいかなる認識と報告によって政策決定されたのかを読み取り、現地での具体的な運営・統制、カラフト住民への影響、カラフト情勢の変化が交易統制に与えた影響を明らかにする。

交易統制について本稿で指摘した点は、第一に、統制のあり方は固定的なものではなく、交易場所や交易実施の許可等につ